「往診」

医学博士
渡辺医院　院長　渡　辺　大　介　氏

私の父は内科の開業医だった。祖父は戦死した為、戦後は経済的に苦労したようだ。幸い成績は優秀だったため近くの開業医宅に住み込み、医大に進学させてもらった。住み込みのため、まき割りから畑仕事まで様々な雑用をこなした。

卒業して医師の資格を取るとその医院の往診を担当した。往診の依頼があると自転車で患者の家に駆け付ける。内科に限らず、すべての疾患に対応した。

当時は救急車もない。入院が必要な場合は戸板に患者をくくりつけ、父がリヤカーを引いて医院まで運んだという。赤ひげの時代と変わらない。

しばらくすると独立が認められ、借金をして小さな診療所を持つことができた。

自転車がスクーターになり、やがて軽自動車になったが、私が覚えているのは昼夜を分かたず往診して回っている父の姿だった。24時間365日の仕事だったので、無理したのだろう。68歳で永眠した。

後を継いだ私も毎日往診した。診療所に通院していた患者さんもいずれは足腰が弱り往診で診るようになり、在宅で看取る。「最期の脈は先生に取って貰いたい。」と言われると医師冥利に尽きる。こんな医者生活も私の代で終わりかなと思っていたが、大学から学生を往診に連れて行ってほしいと依頼があった。聞けば往診をしている診療所が少なく、実習先に困っているという。私は喜んで引き受けた。若い医学生と往診していると患者さんから喜ばれ、医学生が激励されている。先日などお爺さんを往診していると「おう! 女医さんの、かっこよかー」と声を掛けられ「まだ学生です」と照れながらも喜んでいた。

大病院の専門医でもなく、田舎の小さな診療所の医師として生きた父も見直されているようで嬉しかった。

在宅医療に興味を持ってくれる先生が増えてほしいと願っている。